Osaka University Knowledge Archive

Title	他動詞の再帰性と使役の関係 : 日本語と朝鮮語の対照を通して
Author(s)	生越, 直樹
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1980, 13, p. 3-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56576
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

他動詞の再帰性と使役の関係

―日本語と朝鮮語の対照を通して―

生　越　直　樹

1．序

1.1. 本稿の目的

日本語・朝鮮語の動詞は、それぞれ使役形と呼ばれる形をとることができる。自動詞の使役形は、意味的に他動詞と変わらないものがあることもあって、使役形なのか他動詞なのか、などについて従来から問題となってきた。これに対し、他動詞の使役形については、特に論じられたことはなかったようである。しかし、実際の用例をみると、一概に他動詞の使役形といっても、動詞によって様々な意味をもっていることがわかる。

本稿では、他動詞とその使役形の意味について、日朝対照言語学的立場から考察する。目的は、各動詞のもつ意味的特徴、特に再帰的特徴の有無が、他動詞とその使役形の意味に大きな影響を及ぼすことを明らかにすることにある。

1.2. 使役と再帰性

まず、使役及び再帰性について少し述べておく。次の（例１）（例２）は、ともに使役文とされる文である。

（例１）太郎が次郎に三郎を殴らせた。

（例２）花子が四郎に本を読ませた。

（例１）では、「太郎」は動作を行わせる者、「次郎」は動作を行う者、「三郎」は動作を受ける者である。ここではそれぞれを、「させ手」「し手」「受け手」と呼ぶことにする。ところが、同じ使役文でも（例２）の場合は、「させ手」（花子）と「し手」（四郎）がいるのみで、「受け手」がいない。「本」が「受け手」といえないのは、宮地裕氏が指摘するように、（例３）が認められないことからもわかる。[1]

（例３）＊本が四郎に読まれた。[2]

以上見てきたような登場人物の「し手」「受け手」といった関係は、使役文だけでなく、（例４）（例５）のような他動詞文にも適用することができる。

（例４）次郎が三郎を殴った。
（例１）太郎が次郎に三郎を殴らせた。
（例５）父は太郎にお菓子をやった。
（例６）父は太郎にお菓子を食べさせた。

（例４）では「し手」（次郎）、「受け手」（三郎）のみである。使役文の（例１）に現れる「させ手」（太郎）は、（例４）では現れない。又、他動詞文の（例５）は、使役文の（例６）と構文的に似ているけれども、（例４）と同じく「し手」（父）、「受け手」（太郎）のみで「させ手」がいない。これに対し、（例６）では「させ手」（父）がいる。以上のように、使役文は、「し手」のほかに「させ手」がいるという特徴によって、他動詞と区別される。従って、その文が使役を表すか否かは、「し手」ののほかに「させ手」がいるかどうかによる。

上で述べたことは、朝鮮語についてもいえることである。たとえば次のような例がある。

（例７）a. əməni-ka ai-eke čʰɛk-il ilk-ke ha-jəs'-ta.(3)

b. 母親が　子供に　本を　読ませた。

（例８）a. ai-ka čʰɛk-il ilk-əs'-ta.

b. 子供が　本を　読んだ。

使役文の（例７）は「し手」（ai《子供》）のほかに「させ手」（əməni《母親》）がいるのに対し、他動詞文の（例８）には「し手」（ai）のみで「させ手」がいない。

「以上、使役文と他動詞文の違いについて述べてきたが、他動詞の場合は、「し手」と「受け手」の関係に、さらに考えるべき問題がある。すなわち、（例４）の「殴る」や（例５）の「やる」は、「し手」と「受け手」が別の者であったが、他動詞によっては「受け手」が「し手」自身の場合もあるからである。

（例９）太郎が自分の体に服を｛着た/*着せた｝。

（例10）太郎が次郎に服を｛*着た/着せた｝。

（例11）*服が太郎に着られた。

（例９）で「し手」は「太郎」である。そして、「受け手」が「服」でないことは、（例11）が認められないことからもわかる。（例９）で、「太郎」は服を自分の体に対して着るのである。従って、動作を人と人の関係からとらえた場合、（例９）では「し手」「受け手」はともに「太郎」ということになる。これに対し、（例10）の場合、「し手」は「太郎」、「受

け手」は「次郎」で、「し手」「受け手」が別の人物である。(例9)(例10)は動詞の形が違っており、「着る」は(例9)のような場合にのみ、「着せる」は(例10)のような場合にのみ用いられる。一方、次の(例12)(例13)では、動詞の形が同じであり、「はめる」という動詞は、「し手」「受け手」が同じ場合にも別の場合にも用いられることがわかる。

(例12) 花子が自分の指に指輪をはめた。

(例13) 花子が太郎の指に指輪をはめた。

以上の比較から、同じ他動詞でも、「着る」のように再帰的特徴と積極的に関係するものや、「着せる」のように再帰的特徴と消極的に関係するもの、「はめる」のように再帰的特徴に対し超越的で無関係なもののあることがわかる。本稿では、以下、「着る」のように「し手」「受け手」が常に同一人物である動詞を再帰性動詞 「着せる」のように「し手」「受け手」が常に異なる人物である動詞を非再帰性動詞と呼んでおく。さらに「はめる」のように再帰性に関して超越的で無関係な動詞を無再帰性動詞と呼ぶことにする。

なお、英語で再帰動詞と呼ばれる動詞は、目的語として再帰代名詞をとるものをいう。(4)しかし、ここでいう再帰性は、動詞の意味に基づくもので、統語的に定義されたものではない点を注意しておきたい。

日本語と同様に、朝鮮語の他動詞の中にも再帰性動詞がある。たとえば次のような例がある。

(例14) a. əməni-ka čaki-ïi məli-lïl { kam-as'-ta/

b. 母親が　自分の　頭を　洗った。

* kam-ki-əs'-ta}.

(例15) a. əməni-ka ai-ïi məli-lïl {*kam-as'-ta/ kam-ki-əs'-ta}.

b. 母親が　子供の　頭を　洗った。

(例16) a.* məli-ka əməni-eke kama-č.jəs'-ta.

b* 頭が　母親に　洗われた。

(例14a)では、「し手」と「受け手」が同一人物(əməni《母親》)である。「受け手」がməli《頭・髪》でないことは、(例16a)が認められないことからもわかる。(例15a)では、「し手」(əməni)と「受け手」(ai《子供》)が別の人物である。(例14a)ではkam-《(髪を)洗う》のみが用いられ、(例15a)ではkam-ki-《(髪を)洗う》のみが用いられる。従って、kam-は再帰性動詞、kam-ki-は非再帰性動詞である。なお、これに対し、日本語の「洗う」は(例14b)(例15b)ともに現れるから無再帰性動詞である。

以上述べてきたことを、使役・再帰性・非再帰性に関して図で示すと、図表1のようになろう。ここでいう使役と再帰性は対立するものではない。使役文にもB→Cという関係が含まれうるから、再帰性の使役文や非再帰性の使役文も可能である。この具体的な例は後であげることにする。

図表1

使役文	A→(B→C)	ただしC＝φの場合もある
再帰性動詞文	B→C	ただしB＝C
非再帰性動詞文	B→C	ただしB≠C

A＝させ手　B＝し手　C＝受け手

以下、日本語・朝鮮語において、この再帰性についての違いが、使役形

の意味にどういう影響を与えるのか、又、両言語の間にどのような共通点・相違点があるのかをやや詳しく述べていくことにする。

2. 再帰性動詞とその使役形

2.1. 朝鮮語の使役形

朝鮮語の他動詞のとる使役形には次の2種類がある。(5)

1）動詞の語幹（例：mək-《食べる》）に接尾辞-i-・-u-などが付いた形（例：mək-i-《食べさせる》）（以下この形をi形と呼ぶ）(6)

2）動詞の語幹に語尾-ke（又は-tolok）、さらに助動詞ha-が付いた形（例：mək-ke(mək-tolok)ha-《食べさせる》）（以下この形をha形と呼ぶ）

i形をとる動詞は語彙的に限られており、また-i-・-u-などの接尾辞のうちどんなものが付くかは、それぞれの動詞によって決まっている。つまりi形はそれぞれ一つの語彙とみなしてもよいものである。これに対し、ha形は生産的な形でどの動詞もこの形をとりうる。いいかえれば、朝鮮語の動詞には、i形・ha形どちらにもなりうるもの（限られている）と、ha形にのみなりうるもの（多い）の2種類があることになる。

2.2. 朝鮮語の再帰性動詞とその使役形

まず、朝鮮語の再帰性動詞とそのi形・ha形の関係について考えてみる。次の例は再帰性動詞とそのi形の関係を示すものである。

(例17) a. əməni-ka čaki-ïi mom-e os-ïl{ip-əs'-ta

b. 母親が　自分の　体に　服を　{着た

/*ip-hi-əs'-ta}.

/*着せた}。

(例18) a. əməni-ka ai-eke os-ïl {*ip-əs'-ta/ip-hi-əs'-ta}.

b. 母親が　子供に　服を　{*着た/着せた}。

(例17a)の場合はip-hi-《着せる》が、(例18a)の場合はip-《着る》が、それぞれ認められない。再帰性動詞ip-が用いられる(例17a)では、「し手」「受け手」が同一人物(əməni《母親》)である。一方ip-のi形ip-hi-が用いられる(例18a)では、「し手」(əməni)と「受け手」(ai《子供》)が別の人物となっている。従って、再帰性動詞とそのi形は、「し手」と「受け手」が常に同一人物か、常に別の人物か、という点で互いに異なっている。つまりこのことは、再帰性動詞に対し、そのi形が非再帰性を表すことを意味する。(例14a)のkam-《(髪を)洗う》と(例15a)のkam-ki-《(髪を)洗う》の関係も、kam-ki-がkam-のi形であるから、これと同じである。

では、これらの形とha形の関係はどうであろうか。

ip-のi形とha形の違いについては、すでに柴谷方良氏が論文の中でふれている[7]。柴谷氏はこの論文の中で、ha形のip-ke ha-がしばしば被使役者(causee)の動作を含むのに対し、i形のip-hi-は一般的に被使役者の動作を含まない、ということを指摘している。i形のip-hi-が被使役者の動作を含まないという点は、i形が非再帰性を表すということと一致する。しかし、柴谷氏の論文はi形・ha形とも使役を表すという前提での考察であり、動詞の再帰性という観点からi形・ha形について述べたものではない。以下、本稿では「させ手」「し手」「受け手」の関係からi形とha形の関係を考えてみる。

次の(例19)(例20)はi形とha形の違いを示す例である。

(例19) a. t'al-i inhjəŋ-eke os-ïl { ip-hi-əs'-ta/

b. 娘が　人形に　　服を　{着せた/

*ip-ke(ip-tolok) ha-jəs'-ta}.

*着させた} 。

(例20) a. əməni-ka ai-eke os-ïl hončasə ip-ïlako

b. 母親が　子供に　　服をひとりで着ろ

hɛsə ai-eke os-ïl hončasə {*ip-hi-əs'-ta/

と言って子供に服をひとりで　{*着せた/

ip-ke(ip-tolok) ha-jəs'-ta}.

着させた} 。

(例19a)では ha 形の ip-ke(ip-tolok)ha- が、 (例20a)では i 形の ip-hi- がそれぞれ認められない。(例19a) では 「し手」(t'al《娘》) と「受け手」(inhjəŋ《人形》) がいるだけで「させ手」はいない。これに対し、(例20a) では「させ手」(əməni) がいる。このことから、i 形は「し手」「受け手」の関係を必要とし、ha 形は「させ手」「し手」の関係を必要とすることがわかる。i 形は、(例18a) の説明で述べたように、必ず「し手」と「受け手」が別であり、また必ずしも「させ手」を必要としないのであるから、この点からも、i 形は使役というより非再帰性を表すといえる。一方、ha 形は、常に「させ手」を必要とするから、使役の意を表すといえる。ip- , kam- のように、i 形も ha 形もとりうる再帰性動詞としては、ほかに pis- 《(髪を) 梳く》, pəs- 《脱ぐ》 などがある。

次に ha 形のみをとりうる再帰性動詞と、その ha 形の意味について考えてみる。この種の動詞としては、たとえば t'ï- 《(目を) 開ける》 がある。

(例21) a. hwanča-ka nun-ïl t'-əs'-ta.

b. 患者が　　目を　開けた。

(例22) a. ïisa-ka {hwanča-ïi/*cukïn salam-ïi} nun-ïl

b. 医者が {患者の/*死んだ人の} 目を

t'ï-ke(t'ï-tolok) ha-jəs'-ta.

開けさせた。

t'ï- は (例21a) のように用いられる。(例22a) は hwanča《患者》を用いた場合は認められ、cukïn salam《死んだ人》を用いた場合は認められない。つまり、ha 形 t'ï-ke(t'ï-tolok) ha- は、「させ手」と「し手」がいないと用いられない。従って、この ha 形は使役の意味をもつ。そうすると、t'ï- の場合非再帰性を表す形がないことになる。これは、t'ï- のように「し手」以外の者が手伝うことのできない動作の場合、意味的に非再帰性を表すことができないためと考えられる。この種の動詞としては、他に kol-《いびきをかく》などがある。

以上から、朝鮮語の再帰性動詞の場合、その i 形は非再帰性を表し、ha 形は使役を表すことが明らかになった。

2.3. 日本語との対照

ここでは朝鮮語と日本語を対照することによって、朝鮮語の再帰性動詞・その i 形・ha 形の意味が、日本語ではどのように表されているかをみる。使役についての両言語の対照は、すでに大村益夫氏によってなされている。[8] しかし、大村氏の論文では動詞の再帰性について何も述べられていない。

日本語の他動詞の使役形は、従来、動詞＋「せる・させる」の形（以下この形をセル形と呼ぶ）であるとされてきた。この形のほかに、いくつかの他動詞には、もう一つの他動詞形（以下この形を変異形と呼ぶ）があって、それと対立している。たとえば「着る」に対する「着せる」がこれに

あたる。

朝鮮語の再帰性動詞・そのｉ形・ha 形に対する日本語の対応の仕方には、３つのタイプがある。第１のタイプは次のような特徴をもっている。

１）朝鮮語の再帰性動詞に対し、日本語も再帰性動詞が対応する。

２）ｉ形には変異形が対応し、非再帰性を表す。

３）ha 形にはセル形が対応し、使役を表す。

（例17ｂ）～（例20ｂ）ですでに示した「着る」「着せる」「着させる」の対立がこのタイプに属する。ほかに「あびる」「あびせる」「あびさせる」、「かぶる」「かぶせる」「かぶらせらる」の対立もこのタイプに属すようである。

ただし、このタイプの場合、朝鮮語の ha 形と日本語のセル形とは少し異なる点がある。

（例23）a. əməni-nïn sikmo-eke mjəŋhɛsə t'al-eke

b. 母親は　　お手伝いさんに命じて　娘に

os-ïl {*ip-ke(ip-tolok) ha-jəs'-ta/ip-hi-ke(ip-hi-tolok) ha-jəs'-ta}.

服を {着させた／？着せさせた}[9]。

（例23）は「させ手」「し手」「受け手」がすべて別の人物の場合である。（例23ａ）では ha 形の ip-ke(ip-tolok) ha- は認められず、ｉ形と ha 形の組み合わさった ip-hi-ke(ip-hi-tolok) ha-が認められる。このことは、このタイプでは ha 形が、「し手」「受け手」とも同じ人の場合の使役にしか用いられないことを示している。すなわち、朝鮮語では、再帰的な使役は ha 形、非再帰的な使役はｉ形と ha 形を組み合わせた形で表さ

れているのである。これに対し、日本語では、（例23b）のように再帰的な使役と非再帰的な使役を形態的に区別しないようである。ただ、（例23）のような文は、朝鮮語・日本語ともふつうあまり用いられず、使役以外の表現を用いたほうがより自然なようである。日本語・朝鮮語ともにいえることであるが、それを母語とする人でも、「させ手」「し手」「受け手」の関係が複雑な文になると、その文が正しいかどうか判断しにくくなるようである。日本語・朝鮮語において、あまり複雑な使役表現はふつう用いられないため、そのような表現は不自然な表現として人々を混乱させるのではないかと思われる。

第2のタイプは次のような特徴をもっている。

1）朝鮮語の再帰性動詞に対し、日本語も再帰性動詞が対応する。

2）i 形にはセル形が対応し、非再帰性を表す。

3）ha 形には該当する形がないか、やや不自然さを伴うがセル形が対応して使役を表す。

このタイプの例としては、次のようなものがある。

（例24）a. əməni-ka čaki-ïi os-ïl pəs-əs'-ta.

b. 母親が　自分の服を　脱いだ。

（例25）a. əməni-ka čəčməki-ii os-ïl pəs-ki-əs'-ta.

b. 母親が　赤ん坊の　服を　脱がせた。

（例24a）では、再帰性動詞 pəs-《脱ぐ》が用いられている。（例24b）の「脱ぐ」も常に「し手」「受け手」が同じである。一方（例25a）では非再帰性動詞 pəs-ki-《脱がせる》が用いられ、（例25b）ではこれに対応して「脱がせる」が用いられている。「脱がせる」は従来使役を表すとされていた。しかし、（例25b）の「赤ん坊」は自分で「脱ぐ」という

動作ができないから、（例25b）で「母親」が「させ手」「赤ん坊」が「し手」という関係は成り立たない。（例25b）の場合、「母親」が「し手」「赤ん坊」は「受け手」であるから、この「脱がせる」は、使役というより非再帰性を表すとせねばならない。

では、「脱がせる」が使役の意味で用いられることはないのであろうか。

（例26）a. əməni-ka t'al-eke os-ïl hončasə

b. 母親が　娘に　服を　ひとりで

pəs-ke(pəs-tolok) ha-jəs'-ta.

?脱がせた。

（例26）では「させ手」（əməni・母親）がいる。朝鮮語ではha形が用いられている。一方日本語では、「脱がせる」を用いるとやや不自然な文になる。日本語では（例26）のような状況を使役的に表現せず、別な表現を用いるようである。[10]このように、「脱がせる」は「脱ぐ」の使役の意で用いられないこともないが、その場合日本語としてやや不自然なものとなるのである。

以上のことから、変異形のない場合の再帰性動詞とセル形は、従来述べられていたような他動と使役の関係ではなく、再帰と非再帰の関係にあることが明らかになった。この種の他動詞としては、「脱ぐ」のほかに「はく」などがある。

第3のタイプは次のような特徴をもっている。

1）朝鮮語の再帰性動詞とそのi形に対し、日本語では無再帰性動詞が対応する。

2）ha形に対してはセル形が対応し、使役を表す。

このタイプの例としては、前にあげたkam-と「洗う」の対応がある。

(例14) a. əməni-ka čaki-ïi məli-lïl kam-as'-ta.

b. 母親が　自分の　頭を　洗った。

(例15) a. əməni-ka ai-ïi məli-lïl kam-ki-əs'-ta.

b. 母親が　子供の頭を　洗った。

(例27) a. əməni-ka ai-eke məli-lïl hončasə

b. 母親は　子供に　頭を　ひとりで

kam-ke(kam-tolok)　ha-jəs'-ta.

洗わせた。

(例14)(例15) で、朝鮮語 kam-《(髪を) 洗う》は再帰性動詞、kam-ki-《(髪を) 洗う》は非再帰性動詞である。これに対し、日本語の「洗う」は再帰性を超越した動詞、つまり無再帰性動詞である。セル形の「洗わせる」は (例27b) のように「させ手」がいる場合に用いられ、使役の意味を表す。

朝鮮語の再帰性動詞のうち、この第3のタイプのように日本語の無再帰性動詞と対応するものは、ある共通した特徴をもっている。すなわち、その再帰性動詞は、必ず対格に「し手」の体の一部を表す語をとるのである (対格助詞は lïl 又は ïl《を》)。kam- の場合、məli《頭・髪》や t^həl《毛》が対格をとる。このような特徴をもつ再帰動詞は、日本語にはないようである。そのため、日本語では無再帰性動詞が対応するものと考えられる。この種の動詞としては、kam- のほかに pis-《(髪を) 梳く》などががある。この種の動詞があることは、朝鮮語の一つの特徴だといえよう。又、ha 形のみをとる再帰性動詞 t'ï-《(目を) 開ける》などもこの特徴をもっており、(例21) のように対応する日本語にはやはり無再帰性動詞が用いられる。

これまでは朝鮮語の側から日本語をみてきた。反対に日本語の側から朝

鮮語をみると、日本語の再帰性動詞が朝鮮語の無再帰性動詞と対応することがある。たとえば次のような場合である。

(例28) a. əməni-ka čaki-ïi son-e ton-ïl čy-əs'-ta.

b. 母親が　自分の手に　金を　握った。

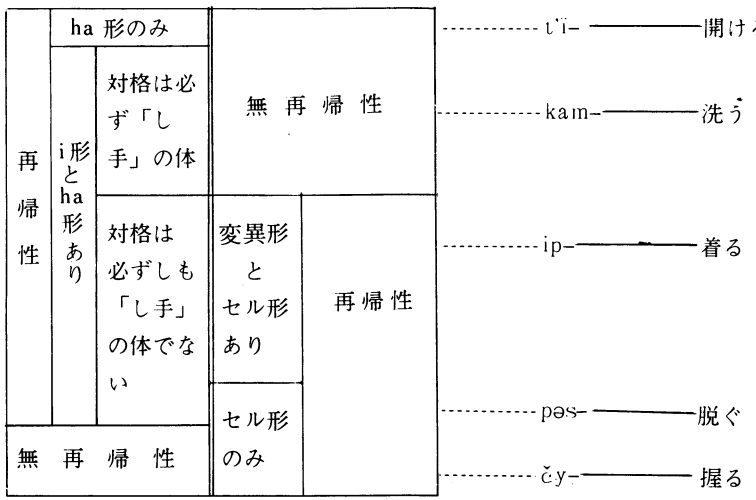
(例29) a. əməni-ka ai-ïi son-e ton-ïl čy-əs'-ta.

b. 母親が　子供の手に　金を　握らせた。

(例28b)(例29b)のように、日本語の「握る」「握らせる」は、再帰・非再帰の対立をなしている。これに対し朝鮮語は、(例28a)(例29a)とも同じ čy-《握る》が用いられており、この čy- は無再帰性動詞とみなせる。

以上の考察から、日本語と朝鮮語の再帰性動詞の対応関係を図表にすると、図表2のようになる。

図表2



3．無再帰性動詞とその使役形

3．1．朝鮮語の無再帰性動詞とその使役形

ここでは無再帰性動詞、つまり再帰性に関して超越的で無関係な動詞とその使役形の意味について述べる。

まず、朝鮮語の無再帰性動詞とそのｉ形・ha形について考えてみる。ｉ形・ha形をとる無再帰性動詞の例としてmək-《食べる》をあげてみる。

(例30) a. kojaŋi-ka ač^{h}impap-ïl mək-əs'-ta.

b. 猫が　朝ごはんを　食べた。

(例31) a. kojaŋi-ka čy-lïl mək-əs'-ta.

b. 猫が　ネズミを　食べた。

(例32) a. ? ač^{h}impap-i kojaŋi-eke mək-hi-əs'-ta.

b. ? 朝ごはんが　猫に　食べられた。

(例30a) では「し手」(kojaŋi《猫》) がいるだけで「受け手」はいない。ač^{h}impap《朝ごはん》が「受け手」でないことは(例32a) が不自然であることからもわかる。(例31a) では「し手」(kojaŋi) と「受け手」(čy《ネズミ》) がいる。このようにmək-を用いた文は、「し手」「受け手」が常に同じ、又は常に別ということがない。従って、mək-は再帰性に関して超越的で無関係な動詞、つまり無再帰性動詞である。

このmək-のｉ形・ha形の違いを示す例を次にあげる。

(例33) a. kanhopu-ka honča məkïl su əpsnïn hwanča-eke

b. 看護婦がひとりで食べることのできない　患者に

pap-ïl {mək-i-əs'-ta/? mək-ke(mək-tolok) ha-jəs'-ta}.
ごはんを食べさせた。

(例34) a. əməni-nïn ai-eke mək-ïlako mjəŋhɛsə kï-eke
b. 母親は　子供に食べろと命じて　彼に
pap-ïl hončasə {*mək-i-əs'-ta/mək-ke(mək-tolok) ha-jəs'-ta}.
ごはんをひとりで　食べさせた。

(例33a) では ha 形の mək-ke(mək-tolok)ha- が不自然であり、(例34a) では i 形の mək-i- が認められない。(例33a) でkanhopu《看護婦》とhwanča《患者》は「させ手」と「し手」の関係にある。と同時に、kanhopu は hwanča に対し具体的な動作を行っているので、その動作の「し手」でもある。つまり、(例33a) の場合、kanhopu は「させ手」であると同時に「し手」でもあり、hwanča は「し手」であると同時に「受け手」でもある。これに対し、(例34a) では「させ手」(əməni《母親》)と「し手」(ai《子供》) の間には、何の具体的動作も行われていない。(例33a)(例34a) とも「し手」のほかに「させ手」がいるので、無再帰性動詞の i 形・ha 形は、ともに使役の意味を表すといえる。そして、i 形の場合、「させ手」は同時に「し手」であるのに対し、ha 形の場合、「させ手」が特に「し手」である必要はない。つまり、i 形の使役は「させ手」による何らかの動作を伴う、いわば"誘動的な使役"ともいえる意味を表す。これに対し、ha 形の使役は「させ手」による動作を伴わない(或いは伴うことを積極的に示さない)、いわば"伝達的な使役"ともいえる意味を表す。

なお、ha 形のみをとる無再帰性動詞の場合は、その ha 形は単に使役を表すだけで、形態的に誘動的な使役と伝達的な使役を区別することはない。

たとえば次のような例がある。

(例35) a. əməni-ka ujupjəŋ-ïl ip-e kak'ai tɛ-ko

b. 母親が 牛乳びんを 口に 近づけて

ai-eke uju-lïl masi-ke(masi-tolok) ha-jəs'-ta.

子供に 牛乳を 飲ませた。

(例36) a. əməni-ka ai-eke masi-lako mjəŋhɛsə kï-eke

b. 母親が 子供に 飲めと 命じて 彼に

uju-lïl hončasə masi-ke(masi-tolok) ha-jəs'-ta.

牛乳をひとりで 飲ませた。

(例35a)(例36a)のように、誘動的か伝達的かの別は、形態によらず文脈による。すでに述べたように、i 形と ha 形の両者をもつ動詞は数的に限定され、ha 形のみとる動詞のほうが数としては多い。

3.2. 日本語との対照

朝鮮語の無再帰性動詞に対して、日本語では、再帰性動詞が対応する場合と無再帰性動詞が対応する場合がある。再帰性動詞が対応する場合については、すでに前節で述べたので、ここでは朝鮮語・日本語とも無再帰性動詞同士が対応する場合について述べる。

朝鮮語では、i 形と ha 形によって誘動的な使役と伝達的な使役を区別することがあった。これに対して、日本語では、(例33b)(例34b)をみてわかるように、一般にそのような違いを形態的に区別しない。すなわち、i 形・ha 形ともセル形が対応するのである。ただし、日本語にも誘動的な使役と伝達的な使役を形態的に区別する場合がある。例としては次のようなものがある。

(例37) a. ipčaŋhanïn salam-tïl-ïn kjewən-eke ipčaŋkwən-ïl

b. 入場する　人々は　係員に　入場券を

{po-i-əs'-ta/？po-ke(po-tolok)ha-jəs'-ta}.

{見せた/？見させた}。

(例38) a. əməni-nïn t'al-eke mjəŋhɛsə čə paŋ-ïi mojaŋ-ïl

b. 母親は　娘に　命じて　その部屋の　様子を

{？po-i-əs'-ta/po-ke(po-tolok) ha-jəs'-ta}.

{？見せた/見させた}。

(例37b)の「見させる」(例38b)の「見せる」はともに不自然である。(例37b)で「させ手」(人々)は「し手」(係員)の動作を誘うような動作を行っている。これに対し、(例38b)では「させ手」(母親)と「し手」(娘)はそういう関係をもたない。このように日本語でも、無再帰性動詞に対しその変異形とセル形がある場合、両方の形は誘動的な使役と伝達的な使役という意味的対立をなしている。(例37)(例38)のように、朝鮮語のi形に対して変異形、ha形に対してセル形がそれぞれ対応するわけである。ただ、このようなタイプは、日本語ではあまり見あたらないようである。

4. 結び

本稿では、朝鮮語と日本語を対照しつつ、他動詞とその使役形の意味について論じてきた。これまでの考察によって、動詞の再帰性の有無がその使役形の意味に大きな影響を与えることを明らかにできたと思う。日本語・朝鮮語における他動詞の再帰性と使役形の意味の関係を図表にすると図表3のようになる。図表3から、両言語が、違うところはあっても非常によく似ていることが明らかになる。

図表 3

	他動詞 / 使役形	再帰性		無再帰性	
朝鮮語	i 形	非再帰		誘動的使役	
	ha 形	使役	使役	伝達的使役	使役
日本語	変異形	非再帰		誘動的使役	
	「せる」形	使役	非再帰（使役）	伝達的使役	使役

本稿で考察したように、それぞれの動詞の意味は、その動詞の派生の仕方及びその派生形の意味に大きな影響を及ぼす。現在のところ、朝鮮語・日本語とも、受身・自動・他動・使役がかかわる態（voice）の問題について、まだはっきりした統一的な理論がたてられていないように思われる。今後、個々の動詞の意味的特徴、特に動作に関係する人の相互関係に注目しつつ、この態の問題にアプローチすることが必要であろう。今回は特に他動詞の再帰性の有無に焦点をあてたため、自動詞の使役形については取り扱わなかった。又、受身についても再帰性の点からいくつか述べるべきことがあるが、これら残された問題については次の機会にゆずりたい。

注

(1) 宮地裕「せる・させる」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社 1969 p 91参照。なお宮地氏は本稿での「受け手」を「され手」と呼んでいる。

(2) ＊印はその文、又はその語を用いた文が認められないことを示す。

(3) 朝鮮文字のローマ字転写は、許雄『國語音韻學』正音社 ソウル 1965 の音素表記を用いた。

(4) 石橋幸太郎ほか編 『現代英語学辞典』成美堂 1973 による。

(5) 朝鮮語の動詞には、一般動詞と、名詞から派生した ha-ta 動詞がある。一般動詞と ha-ta 動詞のとる使役形は少し異なっているため、本稿では特に一般動詞に絞って考察を進めることにする。

(6) i 形を作る接尾辞は-i-.-u-のほかに、-hi-.-ki- -li-.-ku-.-ïk^{h}i-.č^{h}i--ik^{h}i-があり、- iu-のように2つ組み合わさって用いられることもある。

(7) Masayoshi Shibatani, Lexical versus Periphrastic Causatives in Korean, Journal of Linguistics 9, 1973, p 283 参照。

(8) 大村益夫「日本語・朝鮮語の表現について一受身と使役一」『講座日本語教育』第15分冊　早稲田大学語学教育研究所　1979。

(9) ？の印は、その文、又はその語を用いた文が、いえないことはないが不自然さを伴う文であることを示す。

(10) たとえば、「母親は娘に服を脱ぐように言った。」とだけいうほうがより自然であろう。